

■ ツインマーマン／ユビュ王の晩餐のための音楽

ベルント・アロイス・ツインマーマン（1918—70）は第2次世界大戦後に活動を展開したドイツの現代作曲家である。2008年に日本で初めて新国立劇場で上演された彼のオペラ《兵士たち》（1965）は圧倒的な音楽で話題となった。《ユビュ王の晩餐のための音楽》はシュールレアリスム演劇の先駆けと目されるアルフレッド・ジャリの不条理劇『ユビュ王』に基づくバレエ音楽として作曲された。すべてが引用だけで作られた巨大なパズルのような作品で、《プレザンス》、《ディアローグ》、《モノローグ》、《フォトプトシス》など1960年代にツインマーマンが取り組んだ「引用の音楽」の中でも最も過激な一作である。

3管編成のオーケストラにジャズ・コンボやピアノ、オルガン、ギター2本を加えたやや大きめのアンサンブルで、16, 17世紀の舞曲に基づきながら、バロック、古典派、ロマン派、近現代、そして民族音楽に至るまで、種々雑多の音楽が引用されるごった煮である。「アカデミーへの入会」はベルリン芸術院に迎えられたときに作曲されたことを示す序曲。芸術院のメンバーにちなんだ曲にディエス・イレが絡む。このあとに6つの舞曲が続く。そのうち第3曲と第6曲は過去のバレエ音楽のように聞こえるものの、じつはツインマーマン自身のラジオ劇《月の鳥》（もしくはその改訂《アン・プティ・リヤン》）からの引用となっている。

傑作なのは終曲の「洗脳行進曲」だ。驀進するように反復される和音はシュトックハウゼンの《ピアノ作品IX》で最初に連打される和音。「正しい軌道」というシュトックハウゼンの考え方に激怒して、強烈な批判を込めている。この部分、「ワルキューレの騎行」（ワーグナー）や「断頭台への行進」（ベルリオーズ）と組み合わせながら、和音の反復はなんと全部で631回に及ぶ。ちなみに、おびたしいパッチワークの中に、今日の後半に演奏される《展覧会の絵》も含まれている。

白石美雪

楽器編成

フルート3（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持ち替え1）
クラリネット3（バス・クラリネット持ち替え1）、テナーサクソ（アルトサクソ持ち替え）、
ファゴット3（コントラ・ファゴット持ち替え1）、ホルン4、トランペット3
トロンボーン3、チューバ、ティンパニ2、ギター2（マンドリン持ち替え1、エレクトリック・ギター持ち替え1）、ピアノ（チェレスタ持ち替え）、パイプオルガン、ハープ、
コントラバス4、コンボ4（コルネット、クラリネット、エレクトリック・ギター、コントラバス各1） ※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。